

ポストモダンの倫理（1）
—ジェイムソンとジジェク—

伊藤由子

1. 形式化と「時代の倫理」

倫理は世につれることなどない、という考えもある。しかし此岸の善悪がその社会の人々の行動の指針となったり、逆に善悪の彼岸を求める契機となることは否定できない。そしてさまざまな社会の善悪（モラルと呼んでおこう）が倫理となるためには、まさに（実践）理性が必要なのである。だがその理性は、スラヴォイ・ジジェクが「形式化」について言うように、様々なモラル（「ナラティヴ」）の「平和共存を保証する中立的空間」（ジジェク2002=2005：58）ではない。それらのモラルは、あるいは権利を主張し、あるいは文化的なコードを表明しつつ敵対し合っているのである。したがってポストモダンの、「すべてを包括する大きなナラティヴ（物語）の不在へ近接するにあたって採らねばならない」方法は「形式化」であるとジジェクは言うのだが、その形式化をなした人間として彼が挙げるのは、マルクスとフロイト、そして彼らをまた形式化したレーニンとラカン、あるいはキリストを形式化した聖パウロ、そしてヘーゲルである。

おそらくこれが時代の倫理というものであろう。すなわち、形式と内容といった昔からある概念がドゥルーズの「特異性」によって組み替えられ、ジジェクの言う「形式化」は学の倫理として表明されているのだが、そのことによって共時的な「普遍的」概念となる。だからこそこの概念はマルクス以下上に挙げた人々の著作にあてはめられるのだ。そして「形式」概念はヘーゲルの「形式」へと直接結びつけられる。

ヘーゲル『精神現象学』は、リチャード・ローティによる読解とは対照的に、主体性の誕生とその配備についての大きな物語などではなく、主体性の〈形式〉を指示している。ヘーゲル自身がその「序文」で強調するように、それは「形式的側面」に焦点を当てている。（ジジェク2002=2005：59）

「大きなナラティヴの不在」はリオタールによるポストモダンを示す概念だが、ナラティヴは大きなものであれ小さなものであれ表象である。そしてその対概念として解釈がある。しかし形式の背後の内容を解釈してそれを再現するのではなく、形式そのものを記述＝現示することが形式化であるとジジェクは言う。つまり、リオタールの概念を通時的に解釈したローティとは異なって、ジジェクは形式化しているのである。そしてその形式化こそが現代に要請される方法だと言う。

形式化はしかし、モダンの芸術の目指すところでもあった。フレデリック・ジェームソンは、フロベールの有名な手紙を引く。「私が美しいと思うこと、私が書きたいと思うことは、何についてでもない本、外部とのつながりのない本であり、地球がなんの支えもなく空中に浮かんでいるように、その様式というただただ内的な力によってまともまっているようなものです。事実上主題というものがない、それが考えられるにしても、少なくともほとんど主題は見えないような本です……」（ルイーズ・コレ宛て、1852年1月16日付。ジェームソン1994=1998.58より重引）ジェームソンはマラルメやミースの作品を評価するためには、「この近代の目的論、とりわけ、何よりも内容一般を対象にしているらしい明確な禁止の登場の中心にある…禁止、さらに強固なタブーと方法的な手続の生産」¹⁾を理解する必要がある、と述べる。

もちろん、ここで使われている「形式」はジジェクの、「中立的な〈形式〉」に支えられ、その偶発的で固有な内容から独立して存在する『形式主義』とはおよそ無縁（ジジェク2002=2005：58）な〈形式〉ではない。だが、「形式主義」の「形式」はそれほど「中立的」なものなのか？この疑問はジェイムソンがモダニズム美学を理解するにあたって、その「形式」ではなく、「内容」がそこで何を意味していて、なぜ作品の中の「内容」の存在が欠陥と感じられたかを問うことに「すべて」がかかっている、と述べていることと同じである。モダニズム美学は「内容」を取り除くことを目的としたのだが、それはつまり、「内容」がモダニズムにとって逆にきわめて重要なものであることを意味している。「内容」概念はモダニズム美学にとっては夾雑物ではなく、むしろ穴だったともいえる。

ジジェクは同じ著作の第13章を「控除の政治はあるか？」と題し、〈現実的なこと〉に近づく2つの様式、「純化」（「暴力的表層を剥ぎ取って〈現実的なこと〉の核芯を特定しようとする」と試みる）もの、「控除」（「〈空〉から、すなわちすべての既定の内容の還元（控除）から出立し、ついでこの〈空〉とその代役を果たしている或る一つの要素との最小限の差異を打ち樹てようと努める」もの）（ジジェク2002=2005：223）のうち「控除」を「より生産的」な途と説く。ジェイムソンがしようとしているのはこの「還元」なのである。

しかし彼の取る方法は批評である。ジェイムソンは『時間の種子』において、モダンの批評者でありながら同時に継承者でもあるポストモダンを描くのに、「二律背反」という形式を当てる。ついで、1927-28年に書かれながら英訳は1978年、原語のロシア語版は1988年によりやく出版された、「偉大なモダニスト」アンドレイ・プラトノフの作品『チェヴェンゲール』の「形而上学的先行性」が、つまり、社会的なユートピアにおいては個人的な死その他の実存的苦悩がよりおおきなものとなるというポストモダンの真実の「先取り」がなされている例として批評される。つづいてポストモダンの建築を記号論で分析し、最初に高度モダンを否定する「様式としてのポストモダニズム/新合理主義/批判的地域主義」としてグレマスの四辺形で示された考えが、様式としてのポストモダニズムと批判的地域主義の対立となる（新合理主義はモダニズムと批判的地域主義的な装飾とを足したものと還元される）。そしてポストモダニズムの一つ、批判的地域主義への、ジジェクが中立的「形式」に対して発したのよりももっと生産様式にかかわった批判で締めくくられるのである。

このポストモダニズムの建築家としてジェイムソンはアイゼンマンを取り上げ次のように記す。高度モダニズムの詩、マラルメにあっては脈絡や基盤を失った無意味な言葉が絶対的な統辞法のもとに絶対的な文を書こうとするのだが、この脈絡や基盤の後退は歴史的事象と考えられる。アイゼンマンの建築においてはそれらの言葉は（全体の中の部分ではない）部分、要素、シニフィアンとなる。初期には形式主義者であったアイゼンマンが、まず立地（サイト）を「内容」として発見した時、彼は通常の、サイトの条件を繰り返すことによって建物が寓意をもつようにするのではなく、寓意なしで建築するというまったく新しい方法を試みることによって反基礎付け主義者としてふるまっていたともいえる。彼はその後、統辞法作用そのものを疑うようになり、色の枠組みや時間的な層が設計の幾何学的な図に重ねられるようになる。オハイオ大学のウェクスナー美術センターでの、巨大な廃墟と呼ばれる建物群の間を斜めに横切るガラスの足場、「格子の重ね合わせ」がそ

の「劇的な例」である。そこでアイゼンマンはスケーリングと彼が呼ぶ方法をとっている。それは「もっと根本的で形式的なことを達成する。すなわち、共時的なものの方線（格子）を、いくつあってもいい通時的軸に投射することによって、ゲシュタルトから複数の読み方をとりだすことである」。それは建築の古い物語をすべて語らせ、かつその「安定を崩す」。同時に新しい物語がありうることをも保証する。（ジェイムソン1994＝1998：205-229）

ここで最後にジェイムソンが使う「形式」はほとんどジジェクのそれである。ジジェクであれば、「アイゼンマンは建築の開かれた歴史を形式化した」といっただろう。だがジェイムソンはアイゼンマンを形式化したかと問われれば、私は肯定することはできない。ジェイムソンの用いる重要な概念とそれらの間の関係を表す言葉がほとんどアイゼンマン自身の言葉に依拠しているからである。（私も前の段落で同じようにした。しかし私の為したことは単に乱暴な要約にすぎない）。ジェイムソンはアイゼンマンに寄り添ってその理論と建築とを「翻訳」（ジジェク2002＝2005：60）したのである。

形式主義嫌いのジェイムソンではあるが、後期アイゼンマンの為した「形式的なこと」には、「つねに・すでに（アルチュセール：引用者）をもすべて制作する」「パートランド・ラッセルの神」とまで持ち上げ、非常に高い評価を与えている。ここでジェイムソンが言うアイゼンマンの「歴史性」は、ジェイムソンの考えでは反基礎付け主義者（構築主義者）がすべて清算しようと考えていることだからだ。そして反基礎付け主義のような「倫理的価値」がなぜこのポストモダンの時代に受け入れられたのかにジェイムソンは興味を抱いていた。アイゼンマンへの評価はこの疑問への彼自身の回答ではある。しかしアイゼンマンがこのような制作をなしたのは、彼が反基礎付け主義的な形式主義者だったからなのか、それとも「内容」を求めようになったからか？もしくは再発見した「内容」の内容によっているのか？

アイゼンマン個人に関してはジェイムソンの回答は比較的簡単だ。反基礎付け主義的な形式主義者であったからこそ、アイゼンマンはサイト、例えば地理的条件（「地理的擬態」（ジェイムソン1994＝1998：214））を無批判に建築の形式に受け入れず、異なった文脈（例えば都市／郊外といった空間）の中で「内容」として受け入れた。内容を再発見することは形式主義者の「化学的必然」（ジェイムソン1994＝1998： ）である（つまり、「自然」な、ということになるが、ジェイムソンは自分が評価する人間については前に低い評価を下した言葉、「反基礎付け主義的自然主義」は用いない）。「内容」は「形式主義的」（ジェイムソン1994＝1998：66）に、つまりカントやハーバマスやムフにおいてそうであるように出発点や前提が結論となるようには選ばれていないⁱⁱⁱ⁾ので、まずは首肯でき、ついでサイトの歴史性を、受け入れざるを得ないもの、あるいは説明書のような外部メディアが支えるものとしてではなく、建物の形式それ自身に物語らせるというプロジェクトにしたことで、高く評価される。これではジェイムソンはアイゼンマンを反基礎付け主義者として評価していることになりはしまいか？「内容」の内容だけは、上述したようにふつつ反基礎付け主義者が受け入れないものであるが、それがどのように「選択」可能になったかを考えてみればよい。ジェイムソンが例として出す、斜面というサイトでは、土を入れてあるいは削って平面にすることが資金的に許す場合のみ、つまり資本の論理で等質になった場合に選択は可能になる。それ以外の場合には所与として、条件として受け入

れ、ジェイムソンも指摘する通り、そこに建つ建物は斜面の線を繰り返してサイトが寓意となることは避けられない。異なった文脈での斜面の受け入れ、アイゼンマンが採用したような、都市／郊外という空間で考える斜面ではその空間は建物と比較すれば非常に大きく（この時点でのちにアイゼンマンがとる手法スケージングが暗示されている）、建物はまだ浮遊する「部分・要素・シニフィアン」でありうる。この場合にはこの空間は歴史性や意味を持つ空間でもあり、そのようなものとして選択肢となりうるが（それが「後衛」としての批判的地域主義がとった道である）、アイゼンマンはこの時点では単に大きな全体空間として、受け入れるだけだ。それは中のすべてを包括する大きなナラティブではない。後期のロングビーチ大学美術館ではカリフォルニア州の歴史がレイヤリングによって建物が語るものとなるが。したがってアイゼンマンの場合には「内容」の内容でさえ形式としての論理がなければ採用されない。ジェイムソンが指摘する通り、それは選択肢ではないのである。したがってジェイムソンの場合にも、「形式化」は「大きなナラティブの不在に接近するために採らねばならない」（ジジェク）「倫理的価値を持った」（ジェイムソン）方法となる。

2. 可能性としての歴史叙述

新しい物語の可能性を許す歴史叙述は可能なのだろうか？歴史観というような抽象的な場においては、複数主義も可能であろう。選び取られた史実を多様に解釈するという複数主義である。ⁱⁱⁱ⁾ だが歴史叙述を問題にすれば、ことはそう簡単ではない。

ジェイムソンもアイゼンマンの建築について、言うように、歴史の各層は「たがいに還元でき」ず（ロミオとジュリエット展示について）、「さまざまな時間帯の座標どうしの非互換性という形で、劇的に表現されている」（カリフォルニア大学ロングビーチ校大学美術館について）。（ジェイムソン1994=1998：218-9）これらは、ピエール・マシュレーの『文学生産の理論』（「今や消え去ったアルチュセールの規範集のうちにあった、かつての古典的テキスト」）の、様々な芸術作品の分析を当てはめた議論なのだが、マシュレーは「かつての芸術作品」が「ばらばらの素材の塊」が美的イデオロギーで無理やり統一されたかに見えるだけの不整合にしかすぎず、その不整合は「より深い歴史的・社会的矛盾の兆候」と読まれるというらしい。その不整合は矛盾とみられ、したがって作家がする統一化は、「社会的で政治の原型となるような行為としての価値を要求する。」（ジェイムソン1994=1998：215-218）分析はその統一化を明らかにすると同時に、矛盾が解決できないものであることを明らかにする、というのだ。

この議論はまた、歴史叙述とその批判にも当てはめることができるだろう。たがいに相容れない証言が様々な立場からそれぞれ表明する権利を主張している時、そのどれを「史実」として選択するか、それらの不整合をどのように解釈・解決して一つの物語にするかは歴史家にかかっており、その叙述自身も政治的行為となる。だがその行為は同時に、どのような選択・解釈が行われても不整合が解消されないことを明らかにしてしまう。だとすればその叙述に対する批判もまた、整合されえない「史実」や証言の「不連続な共存」としかなりえない。

「史実」や証言のうちから「客観的真理」を選びわけることが不可能なのは、選択肢としてそれらが存在するという考え方がありえないためなのである。ジジエクは「普遍的真理と党派性、加担のふるまいが相互に排他的でないだけでなく、むしろそれぞれがその有様において相互にそれぞれを条件とする」と言う。(ジジエク2002=2005:36) 選択肢として存在するのは「多様なパースペクティブ」であり、そのような状況では、「ある種の言明にかかわる『これは真理か?』という疑問も、『いかなる権力条件のもとでこの言明は発話されたのか?』といった疑問に取って代えられてしまう」というわけだ。

ここで私は、党派性を条件とするような普遍的真理の解明が可能かを考えるために、ジョルジョ・アガンベンの『例外状態』を取り上げる。「例外状態」とは、通常の法が適用できないような「緊急事態」を指すが、その状態がいかに統治にかかわってきたかを解明しようとする書物である。第1章「統治のパラダイムとしての例外状態」では、それが欧米各国でどうパラダイム化されてきたか、通常の状態になっているかが示される。第2章「法律-の-力」では、カール・シュミットの「例外状態」についての説が取り上げられる。そして法律の力という概念が法律ではない政令などが法的な権力をもつことであることが示され、法が他の社会制度と同様、それではないものによって規定されることが述べられる。第3章「ユースティティウム」は、例外状態の期限としてのユースティティウムの系譜学的な研究である。法の空白である例外状態はしかし、法秩序にとって不可欠なもので、神秘的な要素としてみずからの内部に取り込もうとしている、と結論付けられる。第4章「空白をめぐる巨人族の戦い」では、シュミットとベンヤミンの論争が論じられる。前者はアノミーの状態を法との関連の中に保とうとし、後者はそれを関連のないものとしようとする。そしてベンヤミンの純粹暴力が法の外にあると説き、カフカを引きながら「正義に向かっての道」は「法の抹消ではなく、それを不活動化し、無活動の状態に置くこと」というのである。第5章「祝祭・服喪・アノミー」、第6章「権威と権限」では再びローマ法での公的服喪と権威とがどのようなものであったかが研究され、例外状態の日常化や独裁者の権威といった、現在の状態の関連において述べられる。一見してわかるように、これはいかなる意味でも「歴史叙述」ではない。しかし逆に歴史叙述の不可能性を述べたものではないだろうか?アガンベンは生政治という概念を近代のものとしたフーコーを批判し、それがいかなる時代にでも統治者に行使されていたと述べた。また、『例外状態』においても法と言語を同じ社会制度としてとらえる部分もある。この書物が例外状態と法との関係を明らかにするものであることは筆者も述べるとおりだが、実は言語によっても形式化されえない、例外状態において法に節合される生こそがアガンベンの主題だと思うからだ。だからこそ逆に、アガンベンは「普遍的概念」として構築される「例外状態」から、シュミットの構築する「法」を明らかにしてゆくのである。また、「法律の力」によって現代の「構成的権力」、つまりアメリカの世界統治のあり方を解明しようとする。

注

- i) 私たちはここに当然、「平面性」を何よりそのみずからの「本質」とみなし、やはり偶発的な「題材」の物語性をはぎ取ろうとしたモダニズム絵画を付け加えなければならない。
- ii) 形式主義のような、何度も使われている概念にここで「」を付したのは、この部分での「形式主義」

に最もジェームソンらしさが表現されているからである。

- iii) たとえばカー、E. H. の「歴史とは何か」。歴史家の解釈だけではなく、史実の選択が「歴史」を作ると主張する彼は、当然東西両陣営の「歴史」や植民地と宗主国との「歴史」をも知っていた。しかし彼の言う「歴史家」（それは彼自身の表象である）には余裕があって、史実もまた「選択肢」なのである。

参考文献

- Agamben, Giorgio. 2003. *Stato di eccezione*. Torino. Bollati Boringhieri (上村忠男・中村勝己訳「例外状態」未来社, 2007)
- Carr, E. H. 1962. (清水幾太郎訳「歴史とは何か」岩波新書, 1962)
- Jameson, Fredric. 1994. *The Seeds of Time* New York: Columbia University Press (松浦俊輔+小野木明恵訳「時間の種子」青土社, 1998)
- Žižek, Slavoj. 2002. *Die Revolution steht bevor. Dreizehn Versuche über Lenin*. Aus dem Englischen Nikoaus G. Schneider. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag (長原豊訳「迫りくる革命—レーニンを繰り返す」岩波書店, 2005.)